

長野県における新興教育運動の社会史的研究 (2)

小林洋文*

はじめに

拙稿は、中内敏夫との共同研究「新興教育運動の社会史的研究」の一環として、第8回教育目標・評価学会(1997.10.25 中京大学)で報告予定の「長野県における新興教育運動の社会史的研究(1)」(課題研究B)に続くものである。

1. 新興教育運動に関する先行研究・史料等

(1)全国関係

新興教育運動に関する研究の今日までの到達点を明確にするために、研究の基礎作業として先ず以下のような先行研究の文献目録を作成した。(ちなみに、このような最近十数年間の研究成果も網羅した全国規模のまとまった目録は存在しない。長野県関係は次項)

1927・4月、教育評論雑誌『教育新潮』創刊(上田唯郎編集, 上田庄三郎編集協力)。

(昭和2)

28・7月、『教育新潮』休刊。

29・1月、新興童話作家連盟『童話運動』創刊(同年12月, 終刊)

・5月、『少年戦旗』創刊(全日本無産者芸術連盟・作家同盟機関誌『戦機』の付録として)。

・10月、『綴方生活』創刊。(実質的な担い手は、小砂丘忠義・志垣寛・野村芳兵衛・上田庄三郎ら旧啓明会, 児童の村小学校関係者)

・11月、プロレタリア科学研究所『プロレタリア科学』創刊(33.10終刊)

1930・9月、新興教育研究所『新興教育』創刊(約3,000部発行)

31・6月、岩波講座『教育科学』(全20冊, ~33.8)

・12月、『少年戦旗』廃刊処分。

32

33・4月、雑誌『教育』創刊(岩波書店, 44.3廃刊, 岩波講座『教育科学』月報の月刊誌化)

・6月、『新興教育』終刊。活版印刷17冊, プリント印刷4冊。

*〒380 長野市三輪8-49-7 長野県短期大学

- ・ 7月、『児童問題研究』創刊（東京帝国大学セツルメント発行）7号（34.2）より児童問題研究会発行）。
- ・ 10月、『プロレタリア科学』終刊。
- 34・文部省学生部『プロレタリア教育の教材』『プロレタリア教育運動』刊行
- 35・池袋児童の村小学校を母体に、月刊『生活学校』創刊（編集野村芳兵衛）。
- 36
- 37・ 5月、教育科学研究会結成
 - ・ 10月、『保育問題研究』創刊（保育問題研究会機関誌、城戸幡太郎・菅忠道・浦辺史ら）
 - ・ 10月、『生活学校』『教育』誌上で、生活教育論争始まる。
- 38・ 8月、『生活学校』終刊。（全40冊）
- 39・ 9月、教育科学研究会、機関誌『教育科学研究』創刊。
- 40
- 41・ 3月、『保育問題研究』終刊（5月より謄写版『保育問題研究月報』として再刊）。
 - ・ 4月、教育科学研究会機関誌『教育科学研究』廃刊。
- 42
- 43・『保育問題研究月報』廃刊
- 44・ 3月、雑誌『教育』（岩波書店）廃刊。
- 1945・「弾圧の歴史—数々の教育事件」（全教『Kyoiku-Rodo』2号）
- 46
- 47・増渕穰「教員組合運動小史」（『明るい学校』『あかるい教育』）
- 48
- 49
- 1950・後藤彦十郎編『魂あいふれて—二十四人の教師の記録』百合出版
- 51
- 52・海後勝雄他編『近代教育史』（全3巻）誠文堂新光社
 - ・ 壺井栄『二十四の瞳』（小説）
- 53
- 54
- 55
- 56・国分一太郎編『石もて追われるごとく—受難教師の手記』英宝社
- 57・小川太郎編『講座・学校教育 2』〈日本教育の遺産〉明治図書（『小川太郎教育学著作集』第2巻、青木書店所収）
- 58・池田種生「プロレタリア教育の足跡」（『教師の友』）
 - ・ クロタキ・チカラ「教育の遺産を生かす仕事」（『教師の友』58.7月号）
- 59・戸塚廉『いたずら教室』講学館
 - ・ 国分一太郎「教育遺産とは何か」（『カリキュラム』59.7月号）
 - ・ 新教懇話会発足、機関誌『新教の友』創刊（1962『教育運動史』と改題—第6号）

- 1960・井野川潔・川合章編『日本教育運動史 1』〈明治・大正期の教育運動〉三一書房
 ・黒滝チカラ・伊藤忠彦編『日本教育運動史 2』〈昭和初期の教育運動〉三一書房
 ・菅忠道・海老原治善編『日本教育運動史 3』〈戦時下の教育運動〉三一書房
 ・黒滝チカラ「戦前の運動の教訓から学ぶ」(勝田守一他編『戦後教員物語・三』三一書房)
- 61
- 62・中内敏夫「教育運動の抵抗と挫折」(『岩波講座・現代教育学 5』〈日本近代教育史〉
 ・小田真一「わたしの新興教育運動」(『教育運動史研究』6号)
- 63・宮原誠一『教育史』東洋経済新報社
- 64
- 65・『新興教育』(全9巻), 文部省学生部作成◎文書『プロレタリア教育の教材』『プロレタリア教育運動(上・下)』その他, 復刻開始
- 66
- 67
- 68・黒滝チカラ『野に出る教室』シマ文庫
 ・新教懇話会を「教育運動史研究会」と改称, 改組。機関誌『教育運動史研究』
- 69・坂元忠芳/柿沼肇編集・解説『近代日本教育論集 2』〈社会運動と教育〉国土社
- 1970・中内敏夫『生活綴方成立史研究』明治図書
 ・柿沼肇「新興教育運動の研究」(教育運動史研究会編『教育運動史研究』12号, 1-95ページ)
 ・志摩陽伍編集・解説『近代日本教育論集 3』〈教育内容論II〉国土社
- 71・池田種生『プロレタリア教育の足跡』新樹出版
 ・海老原治善編『昭和 교육史への証言』三省堂
 ・竹内常一『生活指導の理論』明治図書
 ・志摩陽伍/中内敏夫編集・解説『近代日本教育論集 4』〈教育内容論I〉国土社
- 72・井野川・森谷・柿沼編『嵐の中の教育—1930年代の教育運動—』新日本出版社
 ・増淵穰著・教育運動史研究会編『日本教育労働運動小史』新樹出版
- 73
- 74・岡本洋三『教育労働運動史論』新樹出版
 ・宮原誠一・丸木政臣・伊ヶ崎暁生・藤岡貞彦編『資料・日本現代教育史』三省堂
- 75・城丸章夫・川合章編『講座・日本の教育 2』〈民主教育の運動と遺産〉, 新日本出版社(岡本・岡野「教育労働者の闘争—『教労』『新教』の教育運動—」)
 ・海老原治善『現代日本教育実践史』明治図書
 ・民間教育史料研究会/大田堯・中内敏夫編『民間教育史研究事典』評論社
 ・浦辺史『日本の児童問題』新樹出版
 ・第2次『新興教育』復刻版刊行(全7巻)白石書店。一彫大な量にのぼる教労長野支部機関誌、『綴方生活』, 『生活学校』なども含まれる。
- 76・大槻・寒川・井野川編『いばらの道をふみこえて—治安維持法と教育』民衆社
 ・現代史の会編集『季刊・現代史』7号〈特集・治安維持法—その実態と動態〉

- ・教育証言の会編『昭和教育史の証言』山脈出版の会
- ・教育運動史研究会編『国民の教育権と教育運動』草土文化
- ・田中新治『教育運動史考』光文堂書店
- ・小川太郎編『児童問題講座 2』〈児童の教育と文化〉ミネルバ書房
- ・『季刊・教育運動研究』を、あゆみ出版より創刊（79.4まで）
- ・中内敏夫『生活綴方』国土社
- 77・森谷清『〈昭和史の発掘〉戦争と教師たち—教育実践の記録』白石書店
- ・山口近治『治安維持法下の教育労働運動』新樹出版
- 78
- 79
- 1980・三橋悌子「『新教』『教労』の教育運動の源流—大正の新教育の変質と『教育新潮』の側面的意義」, 柿沼肇「新興教育運動の概観—日本におけるプロレタリア教育運動」（いずれも『教育運動研究』11号）
- 81・井野川潔『論争・教育運動史』草土文化
- ・柿沼肇『新興教育運動の研究—1930年代のプロレタリア教育運動—』ミネルバ書房
- 82
- 83
- 84
- 85・中内敏夫『生活教育論争史の研究』日本標準
- 86
- 87
- 88
- 89
- 1990
- 91
- 92
- 93・内務省警保局長松本学所蔵史料（国立国会図書館憲政資料室）発掘。
- 94
- 95
- 96・岡野正『1930年代教員運動関係者名簿・改訂版』
- 97・民間教育史料研究会／中内敏夫ほか『教育科学の誕生』大月書店

研究動向の主な特徴点は、第1に、1960年『日本教育運動史2』〈昭和初期の教育運動〉（三一書房）の出版後、いわゆる「教育有伝説」を裏付けようとする証言、研究等が次々と明らかにされたこと、第2に、1981年に柿沼肇『新興教育運動の研究—1930年代のプロレタリア教育運動—』（ミネルバ書房）が出版されて以降、研究がやや下火になってきたかにみえることである。

(2)長野県関係

1933

(昭和8) ◆二・四事件 (2月4日)

- ・信濃毎日新聞9月15日付号外(「二・四事件本日解禁／戦慄! 教員赤化の全貌」)・長野県学務部作成『◎長野県教員左翼運動事件』(謄写印刷)
- ・『職員会誌』(いくつかの学校史に抄録)
- ・信濃教育会「時局に関する宣言並思想事件に就ての対策」(9.28)

34

35・『信濃教育会五十年史』信濃教育会／信濃教育会機関誌『信濃教育』

36

37

38

39・(2.9 国民精神総動員強化方策を閣議決定)

長野県特高課『長野県社会運動史』(2月)

1940

41

42

43

44

45

46

47

48

49

1950

51

52・社会運動史刊行会『長野県社会運動史』

53

54

55

56

57

58・奥田美穂『暗い朝』(小説)

59

1960・藤原晃「長野の運動について」(『日本教育運動史・2』1960, 三一書房)

- ・『新教の友』第5号(6.1 新教懇話会発行)〈長野県を特集〉判沢弘「長野の新興教育運動の調査から」, 岩田健治, 西條億重, 奥田美穂, 増田格之助, 川上義明, 小林とおる, 住田仙三
- ・上伊那綴り方の会編『萌えでる芽—田中ふさ子研究—』, 1971年改訂版)

- 61・長野県学務部作成『㊟長野県教員左翼運動事件』（謄写印刷）見つかる。
- 62・中内敏夫「教育運動の抵抗と挫折」（岩波講座・現代教育学 5『日本近代教育史』）
- 63
- 64
- 65・判沢弘「長野県教員赤化事件」（『思想の科学』11月号）
- 66
- 67・山田国広『夜明け前の闇—信州教育抵抗の記録—』理論社
- ・筒井泰蔵「戦前における私の思想的開眼—長野県の一教師の『私の教育史』」（『新興教育』複製版「月報」改題「教育運動史研究」No.9）
- 68
- 69・二・四事件記録刊行委員会編『抵抗の歴史—戦時下長野県における教育労働者の闘い—』労働旬報社
- 1970・中内敏夫『生活綴方成立史研究』明治図書
- ・青木孝寿「岩田健治〈新興教育〉—農民運動を育てる—」, 平松規「田中ふさ子〈つづり方教育〉—詩で考えさせ導く—」（信濃毎日新聞社編『信州の教師像』）
- 71・藤原晃「(対談) 長野の教育労働運動—信濃教育の变革をめざして」（海老原治善編『昭和教育史への証言』三省堂）
- ・宮坂岩子「藤原晃の教育思想とその実践」, 小田真一「平沢清人と戦前・戦後の教育運動」, 今村治郎「修身科・無産者児童教程について」（『教育運動史研究』13号）
- 72・藤原晃「長野支部の活動について」（井野川・森谷・柿沼編『嵐の中の教育』新日本出版社）
- ・『長野県政史』第二卷（大正・昭和I）
 - ・荒井勉『信州の教育—洋才・土俗・源流性—』合同出版
- 73・今村治郎『修身科・無産者児童教程—長野県教労（二・四事件）の下伊那地区に関する資料—』（初出『教育運動史研究』13号, 1971）
- ・臼井吉見の小説『安曇野』第四部（昭和のはじめから敗戦まで）
- 74
- 75・『新興教育』復刻—教労・新教長野支部機関誌
- ・今村波子「生きて」（『新興教育』復刻版「月報」No.4）
 - ・佐久教育科学研究会編『長野県教育のあゆみ—信濃教育会批判—』労働旬報社
 - ・『信州白樺』〈特集・長野県教育界の三大受難史〉
 - ・民間教育史料研究会／大田堯・中内敏夫編『民間教育史研究事典』評論社
- 76・藤原晃「行動力のある人間、そして人間愛と—長野でのたたかいに弾圧」, 今村波子「獄を出てから—選ぶべき道確かめながら」（大槻・寒川・井野川編『いばらの道をふみこえて』民衆社）
- ・青木孝寿「二・四事件と信州の教師たち」（現代史の会編集『季刊・現代史』7号〈特集・治安維持法体制〉）

- 78・岡野正「長野県『二・四事件』の池田実美氏」(『季刊・教育運動研究』7号)
- 79・『長野県教育史』第十四巻(史料編八[大正8年—昭和8年])
早船ちよ『ちさ・女の歴史』(小説)
- 1980
- 81・柿沼肇『新興教育運動の研究—1930年代のプロレタリア教育運動—』ミネルバ書房
・『長野県史』近代史料編「維新」(「県会」教員赤化事件臨時秘密会記録)
- 82・藤原晃『戦時下における長野県下教員の抵抗の歴史』(「1933年長野県下治安維持法弾圧二・四事件五十周年記念長野県民のつどい」準備会発行)
- 83・「二・四事件」50周年記念県民の集い(1983.2.6)
・治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟長野県本部編集・発行『歴史への証言—「二・四事件」と治安維持法』(松本衛士「『二・四事件』五十周年から学ぶ」他)
・『長野県教育史』第三巻(総説編三)「教員左翼運動と二・四事件」
・松本衛士「二・四事件から五十年」上・中・下(信濃毎日新聞2.2/2.3/2.5)
・青木孝寿・上條宏之『長野県の百年』山川出版社
- 84・『長野県史』近代史料編「社会運動・社会政策」(「労働運動」「社会主義運動」予審尋問調書等)
・松本衛士「治安維持法と長野県—二・四事件」(『歴史評論』)
- 85
- 86・村山英治『大草原の夢』(小説)
- 87・青木孝寿『信州・女の昭和史(戦前編)』信濃毎日新聞社
- 88・治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟長野県本部編集・発行『治安維持法と長野県』(第一部 松本衛士「治安維持法と長野県」, 第三部 二・四事件関係者の証言)
- 89
- 1990・藤原晃『八十年の軌跡—良心の火は燃えて—』ほおずき書籍
・『長野県史』通史編 第九巻・近代3
- 91・堀井政子『小説探求・信州の教師たち』信濃毎日新聞社(二・四事件を描いている小説として、白井吉見『安曇野』, 早船ちよ『ちさ・女の歴史』, 村山英治『大草原の夢』, 奥田美穂『暗い朝』などを取り上げている)
- 92
- 93・青木孝寿「二・四事件60年」上・下(信濃毎日新聞 2.22/23)
・信濃毎日新聞社編『信州 昭和史の空白』(「二・四事件の周辺」)
・内務省警保局長松本学所蔵史料(国立国会図書館憲政資料室)
- 94
- 95・「二・四事件」60周年を記念する会編『いま語る「二・四事件」—「二・四事件」60周年県民のつどい記録—』(藤原晃, 鈴木清子, 小林徹氏らのパネルディスカッション/柿沼肇「『二・四事件』の今日的意義」/小平千文作成研究目録・年表・資料)
・藤原晃『人間の解放へ』(自費出版)
・小林洋文「教育県の社会史・序説—『教育県・長野』の考察」(中内敏夫他編『叢書産む・育て

る・教える一匿名の教育史 5巻』〈社会規範—タブーと褒賞〉所収)

96・岡野正『1930年代教員運動関係者名簿・改訂版』

・池田錬二『小説「二・四事件」赤いホオズキ』章文館（長野市）

・坂口光邦「理想を追い求めた教師たち—「教労」長野支部の教育労働運動—」（『長野県教組五十年史』序章）

97

2. 研究の視点と課題

これまでの研究を概観すると、1960年刊行の『日本教育運動史』第2巻「昭和初期の教育運動」（序章・1章中内敏夫／2章森谷清／3章伊藤忠彦／4章坂元忠芳）を画期として、その後、新興教育運動の研究はかなり進んでいる。そのひとまずの到達点を、例えば柿沼肇の『新興教育運動の研究』（ミネルバ書房、1981年）に見ることができる。

ところが、同書巻末（354ページ）の研究・証言等の年表には、新興教育運動に、後に紹介するような独自の分析を試みている中内敏夫の「教育運動の抵抗と挫折」（岩波講座・現代教育学第5巻『日本近代教育史』、1962年）と同『生活綴方成立史研究』（明治図書、1970年）は載っていない。これは、中内の研究がさほど重視されていないためなのか、それとも異端視されているためなのか？ いずれにせよ、注目に値する研究動向である。とりわけ、新興教育運動の「教育実践の質・独自性」の評価をめぐる、中内敏夫と他の研究者・実践課とでは微妙にと言おうか、対照的に言おうか、評価が異なる事実注目すべきである。この点の解明は、運動・組織・通史に力点が置かれていた従来の新興教育運動の研究水準を超えるための一つの突破口になり得ると考えられる。そこで、研究の有効と考えられる切り口として、先ず中内敏夫の一連の研究成果の「検証」から、研究作業を始めることにする。さて、このような私の問題関心から見ると、さしあたり、次の諸点が重要な研究課題として浮かび上がってくる。

（1）運動の性格と評価をめぐる

「教育内容不在説」（駒林邦男等）は、文部省、司法省関係、及び供述調書に基づいて「公式主義、セクト主義、政治主義、子どものみえない教育運動」と批判。この運動を、プロフィンテルン（労働組合国際連合1921-1938）方式の貫徹（政治革命）の過程とこれに対する官憲の弾圧史としての側面からだけ見ていて、その教育史的意義を評価できない見当はずれの見方。

これに対して「教育内容有在説」（森谷清・伊藤忠彦・坂元忠芳等）もまた無原則に肯定できない。有在説が根本史料としている関係者のドキュメント・証言の類いは、上部組織に対して「教育労働者の特殊性」を主張し、客観的にはプロフィンテルン方式の浸透に対して運動内部で自主的に闘っていた現場教師のものである。その面だけを強調して、この運動がプロフィンテルン方式の貫徹、社会主義革命を目指した革命運動の一環であったという側面を見ない評価もまた一面的である。

（2）二・四事件など新教・教労弾圧事件の位置付けをめぐる

弾圧の対象は教員だけでなく、社会運動全体（労働者・農民・学生・知識層）に向けられていた。「この運動は、今日確認されている限りでは大正末の地軸社におけるアナ・ボル論争以来教員層にも現れたプロフィンテルン方式を組織原則とする近代日本の政治革命をもととの課題にして形成されて

きた工場労働者を主体にし、教員層を傍系に位置付ける政治革命運動とこれに対する官憲の弾圧の歴史を主軸にするものであったが、この戦略が、初等学校の教員層に定着していく過程で、もともと自然発生的な段階においてもかれらのあいだにみられたこれを初等教育改造運動として定着させていこうとする固有のいみでの教育改革運動を内包するにいたった二重構造の運動であったと規定すべきであろう』（中内敏夫『生活綴方成立史研究』593ページ、傍線は引用者）

（3）新興教育運動内部における「独自派」の進出と授業案の質的变化について

「（前期と後期の）違いを無視するのは、生活綴方成立史にとっても、新興教育運動史としても、有効な分析の手掛かりを失うことになるであろう」（同前書609ページ）

＜前期新興教育運動における授業＞

協田英彦の「減法＝二位数より基数を減じ……」の授業記録

『少年戦旗』誌上紹介の各科教材

教労長野支部『修身科・無産者児童教程』の評価をめぐって

*この教程を前期に位置付ける中内氏の評価は、後に見るように他の研究者の評価とは異なる。

＜後期新興教育運動における授業＞—「独自派」の進出

教労東京支部の「新興教育同盟準備会の方針に関する意見書」（昭和8年6月）

新教青森支部「昭和八年度闘争方針書（草案）」（昭和8年5月）

協田英彦の獄中手記（文部省学生部から^④出版、昭和9年3月）

（4）新興教育運動と生活綴方運動の関係

多くの地域で、新興教育運動は生活綴方の運動となんらかの接点が見られる。一方、長野県においては、新教・教労が二・四事件で弾圧された後、生活綴方の教育運動は組織的にはついに興らなかった。それはなぜか？（3）と（4）とは、後に検討するように、密接に関連しているであろう。

3. 特に、教労長野支部作成「修身科・無産者児童教程」の評価をめぐって

上記の研究課題のうち、とくに（3）の課題は重要である。ここでは教労長野支部作成「修身科・無産者児童教程」の評価をめぐる際立って対照的な評価を紹介しておこう。本格的な検証は、紙幅の関係で次の機会に譲らざるをえない。

柿沼肇は、教労・新教の運動を、次のように時期区分している。（柿沼肇『新興教育運動の研究—1930年代のプロレタリア教育運動—』1981年、ミネルバ書房、137-138ページ）「教労」

第一期 「教労」準備会結成（1930年8月）以後。

第二期 日本労働組合同業協会（全協）・日本一般使用人組合結成（31年5月）以後。

第三期 教育労働部書記局確立（31年12月）以後、・全協日本一般使用人組合中央と教労の対立の時期。およびその解決以後から弾圧による組織解体まで。

「新教」

第一期 新興教育研究所創設（1930年8月）以後。

第二期 第二回総会（31年10月）以後。

第三期 新興教育同盟準備会へ転換（32年8月）以後。

第四期 新興教育同盟準備会拡大中央委員会（33年8月）による日本プロレタリア科学同盟（科同）への合同決議以後、科同の終息まで。

このような新興教育運動の時期区分をしたうえで、柿沼は、教労長野支部作成「修身科・無産者児童教程」を、「この運動の中期から後期（「教労」・「新教」共に第二期から第三期）にかけての教育実践を代表しているといわれる」（同前書204ページ）と位置付け、評価している。また、つぎのようにも評価している。

この「教程」を、「教育現場における教師たちの、それぞれの日常的な実践の積み重ねを踏まえて、科学的系統的な検討を加えて総括したもの」として位置付けなければならない。そういう意味で貴重な史料なのである。（柿沼肇『新興教育運動の研究』、『教育運動史研究』12号、52ページ）

これに対して、中内敏夫は、大著『生活綴方成立史研究』明治図書（1970年）において、昭和8年を新興教育運動の質的転換の年、前期・後期の画期の年と見なし、同年に出されて来た東京支部荏原分会の「意見書」（6月）、青森支部の「方針書」（5月）、昭和9年3月に文部省学生部から出版された神奈川支部脇田英彦の「獄中手記」の三つの教科・教材論を、前期とは質的に異なる後期の実践と位置付けて、次のように述べている。

『少年戦旗』誌上その他を定型化の場としつつプロフィンテルン方式の「日本教育」版として成立してきた前期のそれと区別して後期「新興教育」の論理とよぶことのできるものが共通してみられる。それは、前期の場合のように小学校の各教科を政府のおしつけている特定のイデオロギーから解放して代わりに「プロレタリア・イデオロギー」をもってくるのではなく、これを科学と芸術の最先端の水準にラディカルにむすびつけることを強く主張するものであったといえる。（同書607ページ）

これに対して、長野支部の「修身科・無産者児童教程」は「前期のそれを代表する」（609ページ）ものであるというのである。別の箇所でも「一種の政教一致論をひきこんでいたプロフィンテルン方式をまともうけてた小学校の各科の授業をもアジテーションの場とし、結局は各教科を（プロレタリア）修身科に解消してしまう傾向をもっていた『少年戦旗』誌上の各教科や長野支部の『修身科無産者教授教程』……」（603ページ）と前期の実践の評価を規定し、その典型例として長野支部の教程が引き合いに出されている。

このような前期の実践方針と、「『プロレタリア教育』の教育内容を、各領域の文化団体がそれぞれの『専門領域』に蓄積しつつある文化的価値にむすびつけつつ、かつそれを教育の内容という教職独自の観点から『系統的に配列編纂』する」（603ページ）後期のそれとの違いに気づかず、両者を「大同小異」「同列、同質のもの」と見做して、その「違いを無視するのは、生活綴方成立史にとっても、新興教育運動史としても、有効な分析の手がかりを失うことになるであろう」という今後の研究にとって重要な指摘をしている。同様の指摘を、中内は既に1962年の論文「教育運動の抵抗と挫折」（『岩波講座・現代教育学 5』〈日本近代教育史、270ページ〉）でもしている。あるいは、長野県のその後において、生活綴方運動が興ってこなかった事情はこの辺にもあったのだろうか？ 興味深い研究課題として、今後残されている。

長野支部の「修身科・無産者児童教程」は、やはり前期に位置づけるのか、それとも、中内敏夫の評価に反して、後期の性格をもつものと言ってよいのか。このテーマの検討を中心に、さらに運動と実

践の全体像に迫る研究は、別の機会に改めておこなう。

おわりに

当面、研究の手順として、以下のような作業課題を進める。

1. 全国および長野県における新興教育運動に関する先行研究・史料等の発掘、文献目録作成・収集整理とそれらの批判的検討。
2. 生存者（教育関係者以外の者を含む）名簿の作成と聞き取り。
3. 長野県における新興教育運動の「通史」叙述。
4. 長野県の新興教育運動における「教育実践の質・独自性」の吟味。
5. 長野県における新興教育運動の「全体像」を明らかにする。
6. 日本教育史における新興教育運動のもつ教育的・社会史的意義。

(1997. 9. 28)